

研修会参加報告・実施報告

○2008/8/5～6 私大連主催「FDと大学教員の職能開発」(新任教員向け)への派遣

研修名: 社団法人日本私立大学連盟主催
「平成20年度FD推進会議(新任教員向け)」
開催会場: グランドホテル浜松(静岡県浜松市)

○参加報告: 教育学部講師 平井 康章

今回の研修は、FDへの各大学の取り組みの切実度が反映されたのか、40大学85名の参加となり過去最多とのことでした。

研修の概要としては、冒頭に総論としての基調講演、および到達目標に焦点をあてた授業デザインについての問題提起がなされ、その後は7～8名のグループに分かれ、授業に関するグループ討議および模擬授業ワークショップを行うという構成でした。

冒頭の基調講演は「学士力」vs「教育力」と題して、国際基督教大学の鈴木典比古学長による講演でした。鈴木学長は、中央教育審議会・大学分科会の『学士課程教育の構築に向けて(審議まとめ)』をふまえて、そこで求められる「学士力」に対置されるのは教員の「教育力」であるとまず指摘。その上で「学士力」をもった「21世紀型市民」を育成するためにリベラルアーツ教育の必要性を強調され、自らの大学での取り組みの紹介がなされました。1学部6学科でこれまで構成してきたのを、2008年度より学科を廃止し、31の専攻(メジャー制)とする取り組みを始めたこと、入学前に専攻は決めず2年次終わりまでに決める方式になっているとのことで今後の展開が興味深い内容でした。

授業デザインに関する問題提起は、私大連・教育研究委員会FD分科会の圓月勝博分科会長(同志社大学教務部長)が担当され、教育の質保証に向けた授業デザインの重要性、そしてそれは各授業にとどまらず学部や学科レベルのカリキュラムポリシーの実現(カリキュラムデザインと授業デザインの整合性を図る)であるべきことが強調されました。また今回の模擬授業ワークショップの目的として到達目標の自覚をあげて「目標なければ授業なし」との標語が示されました。

その後グループに分かれ、まず「おもしろい授業、つまらない授業」をテーマに討議をおこない、初日のグループでのワークは終了し、その内容をふまえて、15分でおこなう模擬授業の「授業概要」を各自作成し、22時まで提出という課題がだされました。翌朝より、グループごとに各自15分の模擬授業を披露し、その後10分ほどその授業に対する質疑を行い、聴衆(学生役)を務めたグループメンバーが発表者に向けてコメントを記入する、という手順をくりかえし、発表終了後グループでのふりかえりを行いました。私の所属したグループには、留学生を対象にした日本語教育、社会福祉、宗教学(浄土教)、政治学、そして理系の機械学習・放射化学、歯科麻酔学を専門にされる先生方がおられ、畑違いのバラエティに富んだ講義を伺うことができました。

メインの研修はこの模擬授業ワークショップでしたが、教員歴4ヶ月の新米教員の私にとっては

多々得るものがありました。事前準備が一切なく、15分でホワイトボード以外の機材もなく授業を行うという条件設定と、アルコールの出る懇親会の後に授業概要を短時間で作成しなければならぬという研修プログラムに、鍛えられるといえなくもないのですが、消化不良と勿体ない思いもございました。他の先生方からも要望が出ていましたが、パワーポイントの効果的活用法等を知る意味で、取り組みの実例を知る機会になればさらによかったと感じられました。

グループでのふりかえり終了後、その結果を全体の席でグループ代表者が報告をし合い研修は終了となりました。

この研修に参加させていただき、様々得るものはございましたが、専門の違う他大学の教員の方々と知り合う機会が得られたことが一番の収穫でした。また授業改善の取り組みが各個人の教員の努力に頼るのではなく、いかに組織的に授業改善のみにとどまらず取り組んでいけるかがより重要であることを実感する機会ともなりました。派遣いただいたことに深く感謝致します。得られた成果を少しでも今後の仕事に活かしてまいります。

○参加報告：工学部環境共生工学科教授 桑田 正彦

概要：

新任専任教員向け研修会に参加した。40校から85名の参加があり、平均年齢は38.5歳とのこと。

基調講演としてICUの鈴木学長より、高等教育のグローバル化、大学教育の質保障にたいして、ICUはリベラルアーツ教育を行うべく学部制を廃止して、フレキシブルな専修分野(メジャー)制を採用した。その目指すところと、どのようなシステムで運用されるかのお話があった。

続いて、同志社大学の圓月先生より授業デザインの重要性と題して、学生に何を伝えたいかを考えて骨格を作り授業をデザインする。個々の教員が担当する授業は124単位中の2単位に過ぎないので、チームワークで学士課程教育の質向上を目指す必要がある。シラバスの到達目標の書き方などの具体的な助言があった。

そのほか、多くの私立大学は経営的な困難に直面している。大学は何をしなければならないか？学生に付加価値をつけて送り出すことを求められており、教員は授業単価に見合った授業を行う義務がある。そのためには授業改善、教師のスキルアップが必要。Student Satisfactionこそ今私大に求められていることである。などのお話があった。

基調講演に続き、小グループに別れてグループ討論と模擬授業が行われた。

私のグループは、ICU教養学部准教授、大谷大学文学部講師、流通経済大学法学部講師、西南学院大学法学部准教授、拓殖大学商学部助教、東海大学教養学部講師の方々とFD委員の慶応義塾理工学部教授がコーディネーターとして参加した。

よい授業、悪い授業についてのグループ討議が行われた。

よい授業では具体例が豊富でわかりやすい、声をはっきりして聞きやすい、間がよい、興味深い余談を挿入してくれる、しっかり準備をしている、熱意が伝わるなどがあげられた。

ジョークを交えた楽しい授業というのがあったがこれは教員の個性によるところが大きく、誰にでもできるものではないとの意見もあった。一方、悪い授業では教科書やノートを棒読みする、自信のなさが伝わってくる、話し方が下手、声が小さい、進行が早すぎてノートが取れない、字が見にくい、内容が面白くない、論争ネタに公平でないなどがあげられた。

また、パワーポイントを使用した授業の是非について議論となり、大方のメンバーは否定的な意見であった。

次に、教員役と学生役に別れて模擬授業を行い、学生役による授業評価が行われた。最後に各グループの結果発表を行い終了した。

感想：

グループの構成で理系は私一人、他の方はみな文系で、模擬講義のテーマもお経から経理、経済、行政、刑法、アフリカディアスポラと多彩であった。上手な人の講義は専門分野が違っても内容がよくわかるが、あまり上手でない人の講義はほとんど理解できず、教師のスキルによって学生の理解度が大きく異なることを身を以って体験することができた。また、自分の授業の問題点を客観的に指摘してもらうことができ、大変有意義であった。

最後に、この経験を自分の授業改善に役立てて行く所存であり、このような機会を与えていただき感謝いたします。

○参加報告：経済学部講師 増井 淳

日本私立大学連盟が主催する今回のFD推進会議では、まず参加者が「よい授業」「悪い授業」の例を挙げ、それぞれの種類の授業がどのような性質を備えているかについてグループディスカッションを行った。そして、それらの性質を念頭に置きながら、各教員が持ち時間 15 分を使って模擬授業を行い、互いの授業の改善点を指摘し合った。その際、授業における適切な到達目標の設定を意識するよう心がけ、また模擬授業後は、教員が事前準備やクラスマネージメントにいかに取り組みべきかについて意見が交わされた。個人的に最も印象に残っているのは、相手と上手にコミュニケーションを行うためには、内容よりも視覚(教員の態度・姿勢)や聴覚(しゃべり方)といった要因の方が重要であるという指摘である。このことは内容を疎かにしてよいということではなく、いかに授業内容が面白くても、教える側の熱意と伝え方に問題があれば素晴らしい授業にはなり得ないと私は解釈をしている。

他大の、かつ専門の異なる先生方との意見交換は非常に有益なものであったが、その一方で、どのような授業が「よい授業」「悪い授業」なのかということについて、見解の相違が見られた。幾つか例を挙げると、「ほぼ全員に単位を与える授業」、「国家試験での合格率を高める授業」、「教員の専門性を生かした高度な内容の授業」、「学生とコミュニケーションを頻繁にとる授業」などである。こうした曖昧さを払拭するためにも、主催者側から「よい授業」のモデルケースを幾つか紹介

してもらい、その中で自分の専門分野に適した「よい授業」のイメージを掴むことができれば、より充実した会議になるのではないかと感じた。どのような授業が理想的かということについては、教員の専門分野や各大学の建学の理念に応じて違いが生じるはずである。そうした違いをふまえながら、学生のあるべき姿を含めて学部ごとに議論を重ね、そうした理想像を教員間で共有し、その実現に向けての具体的な措置を講じていく必要があるだろう。